

平成 29 年  
ゼニガタアザラシ繁殖調査

## 1) 目的

北海道沿岸には 5 種のアザラシ類やトド、キタオットセイにくわえ近年ではラッコと多様な海棲の食肉目哺乳類が生息する。アザラシ類のうち 4 種は氷上繁殖型で大部分が流氷接岸期に来遊するものであるが、陸上で繁殖するゼニガタアザラシは一年を通じて北海道東部沿岸に生息する。同種は 1970 年代には乱獲や生息地の破壊によって 400 頭程度にまで減少し、環境省レッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。一方で 1000 頭前後まで回復してきた近年では、漁業被害や漁網での混獲といった人間との軋轢が深刻化している地域もある。

浜中町内にもゼニガタアザラシが上陸する岩礁（以下、上陸場とする）が存在するが、そのうち数ヶ所は 1980 年代までに過度の狩猟や漁業の稠密化によって崩壊・消滅した。その中で初田半は、1990 年代後半には非繁殖期の上陸場として再利用されるようになってきたことが明らかになっている。浜中湾北部の上陸場では帯広畜産大学ゼニガタアザラシ研究グループをはじめとする年 2 回のセンサス（個体数調査）で、長期の個体数動向が比較的把握されている。ただし年 2 回の調査であり、繁殖期を通じたモニタリングは行われていない。また、沖合にあるホカケ岩や過去に消滅したケンボッキ島の現状については近年調べられてこなかった。ホカケ岩は当基金の調査から浜中湾一帯では最も重要な繁殖場であることが明らかとなりつつあり、2014 年にはおよそ 30 年ぶりにケンボッキ島での繁殖が確認された。

そこで、浜中湾周辺の数ヶ所の上陸場において、繁殖期のゼニガタアザラシ生息数、特に今年生まれた新生仔の数を明らかにし、現状を評価することを目的に調査を行った。ゼニガタアザラシは体表の斑紋が個体ごとに異なり、一生変化しないため個体識別が可能であり、各上陸場での写真撮影による個体データを蓄積することで繁殖状況や寿命、上陸場・地域間の移動等の生活史を明らかにし、将来的な保護・管理に役立てることも合わせて目的とした。

本文に先立ち、調査に協力いただいた高山喜四郎船長、堀場伸也船長、船橋広明船長ならびに浜中漁業協同組合に記して謝意を表す。

## 2) 調査方法

各上陸場の概況や調査手法は下記に個別に記すが、浜中湾周辺の 3 ヶ所のゼニガタアザラシ上陸場で 4~7 月に調査を実施し、原則として干潮時を中心に陸上または船舶からアザラシを数えると同時に 400mm 望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラで個体識別用写真を撮影した。また、ゼニガタアザラシ以外の海獣類を確認した時は種や数を記録した。調査地ごとの概況は以下の通りである。

①**浜中湾北部**： 浜中湾北部に点在する約 20 の岩礁にアザラシが上陸し、陸上からアプロ

一チ可能である。5月18日に干潮を挟んだ数時間、上陸場を見下ろす陸上から双眼鏡（10倍）と望遠鏡（25倍）を用いたカウントを行った。5月30日に浜中湾の海鳥調査を行った際に、小型船で海上から短時間の観察を補足的に実施した。

②初田牛： 根室市との境界近くに位置する岩礁で、1970年代には20～30頭の生息する、小規模ながら安定した上陸場だったが、80年代以降崩壊した。近年は秋から早春に最大30頭程度が上陸するが、過去3年の調査で繁殖期の生息が確認されなかったため、本年度は陸上からの調査は行わず、5月30日の浜中湾海鳥調査の際に海上から小型船で短時間の観察を実施するにとどめた。今後、繁殖地として復活する可能性もあるため、陸上からのモニタリングも定期的に継続予定である。

③ホカケ岩： 霧多布岬の沖合約3kmにある岩礁帯で、陸上からの観察は距離と角度により難がある。5月18日と5月30日に小型のコンブ漁船を備船して、干潮時に30分ほどかけて岩礁を一巡し、カウントと400mm望遠レンズを装着した一眼レフデジタルカメラで写真撮影を行ったほか7月19日、8月5日の海鳥沖合調査の際にも往路または復路で岩礁に接近しての調査を行ったが、これらは必ずしも干潮時ではない。



図1. 浜中湾周辺におけるゼニガタアザラシの上陸場。

④ケンボッキ島： 琵琶瀬湾の沖に浮かぶ無人島で、1970年代前半には少数の生息が確認されていたが、その後消滅状態が続いた。2014年の調査で親子3組を含む18頭を確認し、上陸場復活の可能性が示唆された。本年度は4～7月にアゼチの岬ならびに琵琶瀬地区の陸

上から望遠鏡を用いてカウントした（ただし、上陸場の一部しか見えないので個体数は過小評価）ほか、5月18日ならびに同30日に小型漁船で島へ接近してのカウントと写真撮影を行った。

### 3) 結果ならびに考察

①浜中湾北部： 5月18日に1歳以上1頭、5月30日に1歳以上3頭の遊泳が上陸場周辺で観察されたが、上陸また新生仔は確認できなかった。調査日数が限られているため偶然に左右されている可能性は否定できない。ただし、2014年には親仔2組を含む20頭近くが観

表1. 浜中湾北部における繁殖期(5~6月)のゼニガタアザラシ確認数.

年	2014	2015	2016	2017
確認数	18(2)	6	3	3

\* 確認数の( )は新生仔

察されていたのに対し、続く3年間は10頭以下で新生仔は確認できていない(表1)。上陸場の陸地側では牧草地造成事業が行われるなど人間活動による繁殖場放棄が進行している可能性も

あり、今後の動向に注目する必要がある。本種は近年、襟裳岬など特定の上陸場での個体数増加によりレッドリストの格下げ、駆除などがなされているが、厚岸付近の小規模上陸場でも本地点と同様に特に親子の個体数減少が知られており、保護管理に当たってはそれらも考慮する必要があると考える。特定上陸場への集中は局所的な漁業被害の増加、伝染病流行時の大量死リスクなどをもたらすからである。この場所はアプローチが比較的楽であるため、寿命、育仔数など個体群動態に関わるパラメータを得るのに適しており、その損失は本種の保護・管理全体に影響を与えらるもいえる。

②初田牛： 5月30日の海上からの調査ではアザラシは観察されなかった。2014年には5

表2. 初田牛における繁殖期(5~6月)のゼニガタアザラシ確認数.

年	2014	2015	2016	2017
確認数	5	0	0	0

\* 新生仔の確認はなし

頭(新生仔なし)が観察されたものの、続く3年間はアザラシを確認できていない(表2)。繁殖場としては依然として復活しておらず、季節的な一時滞留地と思われる。本上陸場や

落石岬は秋~早春にのみ利用され、浜中湾北部でも秋期ならびに春期に上陸数が最大(100頭以上)となり、モユルリ島など根室方面の上陸場との個体の移動が何頭も確認されている。同時期に浜中湾周辺に定着個体以外の回遊個体が来遊していることは明白であり、今後は同時期の個体数や個体識別調査を進める必要がある。ケンボッキ島のように繁殖場として復活した地点もあることから、それらとの環境条件、周辺の人間活動などを比較しながら、何が繁殖場としての復活を阻害しているか明らかにする試みが必要である。

③ホカケ岩： 5月18日に1歳以上30頭、新生仔9頭を確認した。この時の1歳以上には妊娠メスが少なくとも2頭含まれていたため、これらが流産などしていなければ少なくとも11頭の新生仔が生まれたことになる。5月30日には1歳以上37頭、新生仔7頭を確認

した。沖合調査に便乗しての調査では、7月19日に10頭の上陸、8月5日に1頭の遊泳を数えた（いずれも1歳獣の換毛が始まっているため、新生仔の数は不明）。2014年以降の繁殖期の最大確認数を表3に示す。船で接近する短時間の調査のため数は年によって変動するが、5～10組強の親子を含む50～60頭が確認され、浜中湾周辺における最大の繁殖場として比較的安定

**表3. ホカケ岩における繁殖期(5～6月)のゼニガタアザラン最大確認数.**

年	2014	2015	2016	2017
確認数	65(7)	46(5)	45±(10)	46(9)

\* 確認数の()は新生仔

していると考えられる。道内の上陸場で10組を超える親子が確認されるのは襟裳岬、大黒島、厚岸沿岸の1ヶ所だけであり、ホカケ岩はそれらに並ぶ重要な繁殖場である。7月以降に確認数が減少するのは、沖合調査に便乗してのため潮の干満や波の状態が必ずしも良好でなかったこと、周辺で盛んになるコンブ漁の影響で浜中湾北部等へ移動したことの両方によるものだろう。回数や条件の限られる船舶調査での個体群動態把握には困難があり、無人撮影装置等の開発が望まれる。ドローンを用いた調査も有効かもしれない。陸上からも望遠鏡を用いてある程度の観察はできるが距離や死角の問題があり、船上調査の際に陸上からも観察を行い、どの程度の誤差が生じているのか、カウント値の補正が可能か検討する必要もあろう。

5月18日には、ホカケ岩西方に位置する黒岩周辺の海上でラッコ2頭が観察された。道東太平洋沿岸では一度絶滅したが、南千島における個体数の回復にともなって1990年代以降、観察頻度が増加しており、近年では根室半島周辺で複数頭が通年観察されると同時に繁殖も確認されている。法律で捕獲が禁止されており、食性を考えると定置網や刺し網への混獲もそう多くないだろう。海洋環境の劇的な変化が生じない限り、個体数増加と分布域の拡大は今後も続くと思われ、浜中湾周辺でも今のうちからモニタリングしておく必要がある。

④ケンボッキ島： 2017年の調査結果を表4に示す。陸上からは4月11日～7月6日の間の36日に1歳以上1～25頭、新生仔1～3頭が観察された。2回の船上調査

**表5. ケンボッキ島における繁殖期(5～6月)のゼニガタアザラン最大確認数.**

年	2014	2015	2016	2017
確認数	18(3)	25(5)	23(3)	27(3)

\* 確認数の()は新生仔

では1歳以上18～23頭、新生仔2頭が確認された。調査開始当初より陸上と船上調査の値の開きは小さくなってきており、調査員がカウントや地形に習熟してきたことによると思われる。そのため、陸上からのカウントでもある程度の個体数の動向は把握できると考えられるが、正確な新生仔数の把握や個体識別用写真の撮影のために、シーズンに数回は船で接近しての調査が必要である。表5に示した通り2014年以降4年連続で3～5組の親子を含む20頭前後が利用しており、小規模ながら安定した繁殖場として機能していることは明白である。ホカケ岩同様、実際の繁殖数はもう少し多いと考えられ、この状態が維持されるな

ら、浜中湾周辺ではホカケ岩に次ぐ重要な繁殖場といえる。厚岸以東の上陸場としてはこの数は決して少なくない。30年以上ぶりの再繁殖を確認した当初は、保全上の理由から公表を控えてきた。しかし、同島は無人島ながら漁業や観光で利用され、地域住民の多くがアザラシの存在を知るようになってきた。そこで、保全や共存に向けた取り組みを展開する時期

と考え、繁殖場としての復活を論文として公表することにした。論文は「根室市歴史と自然の資料館紀要」に投稿し、現在印刷中であるため、末尾に校正稿を掲載する。ケンボッキ島から7月以降にいなくなるのは周辺でのコンブ漁の影響や餌生物の分布とそれらへのアクセス等による季節的なものであろう。繁殖期に集中的に利用され、その後ほとんど利用されなくなる上陸場は厚岸地区やスコットランドにおいても知られている。

5月18日の船上調査では、ゴマフアザラシの成獣1頭が一緒に上陸しているのが観察された。

表4. 2017年のケンボッキ島におけるゼニガタアザラシ確認数.

月	日	方法	確認数
4	11	陸	1
	22	陸	4
	24	陸	1
5	1	陸	5
	3	陸	4
	7	陸	7/1
	8	陸	2
	13	陸	15/1
	14	陸	9
	15	陸	9
	17	陸	3
	18	船	23/2
	19	陸	3
	21	陸	9/1
	22	陸	14/3
	23	陸	11/1
	25	陸	25/2
	26	陸	2
27	陸	15/1	
28	陸	14/1	
31	船	18/2	
6	1	陸	6/1
	4	陸	9/1
	5	陸	4/2
	7	陸	13/2
	9	陸	3
	10	陸	8
	11	陸	8
	12	陸	6/1
	16	陸	17/2
	17	陸	4
23	陸	7	
26	陸	7	
27	陸	3	
7	2	陸	4
	3	陸	4
	4	陸	3
	6	陸	3

図2. ケンボッキ島におけるゼニガタアザラシ上陸場（広域：矢印）





図 3. ケンボッキ島におけるゼニガタアザラシ上陸場（詳細：円内）

#### 4) まとめ

2017年4～7月に浜中湾周辺の4ヶ所でゼニガタアザラシをはじめとする海獣類の生息状況、特に繁殖状況を中心に陸上と海上から調査した。前年度以前と比較して劇的な変化はなかったが、2000年代前半までは少数の親子が定期的に利用していた浜中湾北部では、2015年以降、3年連続で親子を確認できなかった。調査精度などの問題なのか、実際に繁殖場として放棄されつつあるのか、早急に現状を明らかにする必要がある。初田牛でも2015年以降アザラシは確認されず、1980年代初頭の崩壊以降、季節的に利用することはあっても繁殖場としては復活していないと考えられる。ホカケ岩では10組前後の親子が確認され、実際の繁殖数はもう少し多いことを考えると、浜中湾周辺ではもっとも安定した繁殖場といえる。2014年に30年以上ぶりに繁殖が確認されたケンボッキ島では3～5組の親子が安定して繁殖しており、繁殖に用いる上陸場として復活の途上にあると考えられる。正確な数は船で上陸岩礁に接近しないとわからないが、概数はアゼチの岬から望遠鏡を使って把握可能なので、今後も大まかな傾向の把握と年数回の船舶調査が望まれる。今後の保全と共存へ向けて繁殖場復活の情報公表に踏み切る時期と考え、2014年以降の観察記録を論文として投稿した。

個体ごとに斑紋が異なるゼニガタアザラシの個体識別用写真を4年間でのべ450個体以上撮影したが、整理が追いついていない。整理には時間にくわえ、卓越した技術が必要なので、そのための時間と予算を確保することも課題である。その上で関連する研究者や研究機関とも連携や情報の共有を行い、道東広域でのゼニガタアザラシの移動や個体群動態を考

えてゆくことが本種の生物学の解明、ひいては人間との共存に役立つものと確信する。

上述のように浜中湾一带には秋から早春にかけて来遊個体も加わり、いくつかの上陸場で上陸数が増加する。渡り鳥にとって繁殖地だけでなく、中継地や越冬地もまた重要であるのと同じように、広範囲を回遊する海獣類にとっては季節的に上陸する場所も含め、利用するすべてのエリアが保全の対象となる。今後は非繁殖期、特に換毛期（8月、秋期（9～11月）、早春期（3月）における分布や個体数の調査も必要である。

また、近年は複数頭のラッコが一年を通して沿岸で見られるようになってきた。今後も増加し、水産業との軋轢も予想されるため、個体数や分布、採餌生態などのモニタリングを早いうちから始めておく必要がある。

海獣類の生息地は沖合であったり、陸地でも辺鄙な場所であったりし、日による出現状況の変化も大きいので今後ドローン、無人撮影装置などによる調査精度向上の検討も課題といえる。

また、海獣類がまだ豊かで猟などを通じて接していた人間の高齢化が進んでおり、聞き取り調査などで過去の生息状況や生態の把握もできるだけ早いうちに行っておく必要がある。

（次頁以降は「根室市歴史と自然の資料館紀要 第30号」に投稿した  
ケンボッキ島のゼニガタアザラシ復活に関する論文  
本稿執筆時はまだ印刷中のため校正稿を掲載）

## ケンボッキ島におけるゼニガタアザラシ上陸場の復活 Recovery of Kuril Harbour Seal's Haulout Site at Kenbokki Island, Hamanaka-cho, Eastern Hokkaido

千嶋 淳<sup>(1,2)</sup>・片岡義廣<sup>(2)</sup>  
Jun Chishima, Yoshihiro Kataoka

### 要 旨

北海道東部の浜中町に位置するケンボッキ島は1970年代までゼニガタアザラシの上陸場で、繁殖もしていた。しかし、狩猟などの要因で崩壊し、1982年を最後に繁殖は確認されなくなった。1996年、2005年の漁業者への聞き取りでは島への生息はなく、2002年の現地調査でも遊泳1頭が観察されたのみだった。われわれは2014～2017年に1歳以上15～25頭、新生仔3～5頭を毎年確認し、小規模ながら安定した上陸場として利用されていると考えられた。陸上の観察から4～7月にのみ利用されると思われるが、その理由は不明である。同島での繁殖確認は30年ぶり以上で、本種の上陸場復活の過程として今後もその経緯を見守ると同時に、観光、漁業などが盛んな島の利用に関して地域ぐるみの議論が必要である。

### はじめに

ゼニガタアザラシ *Phoca vitulina stejnegeri* は北西太平洋に分布する陸上繁殖型アザラシで、国内では北海道東部の根室半島から襟裳岬にかけてのみ分布し、上陸場と呼ばれる特定の岩礁で繁殖、換毛、休息を行う。1940年代には数千頭が生息していたとみられるが、過度の狩猟や生息地の開発によって1970年頃には600～900頭まで減少した（伊藤・宿野部 1986）。その後、猟の衰退などにもなって現在は1000頭以上に回復した（Kobayashi et al. 2014）が、個体数減少の過程でいくつかの上陸場が失われた。

ケンボッキ島もその一つで、1974年には1歳以上7頭、新生仔3頭が観察されたが、続く2年間はともに1歳以上2頭のみで新生仔は確認されなかった。4年間の調査中断後も1～4頭（新生仔は0～2頭）のみで、1983年6月には1頭のアザラシも観察されず、この上陸場の崩壊が確認された（伊藤・宿野部 1986）。その後も消滅状態は続き、1996年に同町琵琶瀬地区を中心に行った聞き取り調査でもまれに少数の遊泳個体を見るのみとのことで、2002年6月の上陸調査でも1頭の遊泳個体を確認するにとどまった（千嶋ら 2010）。2005年前後に行われた聞き取り調査でも、島での生息はないとされている（小林・桜井 2010）。

NPO法人エトビリカ基金では浜中町一帯で海鳥の繁殖状況調査を行っているが、その過程でケンボッキ島における親子を含むゼニガタアザラシ上陸集団を2014年から4年連続で確認した。繁殖をとまらぬ上陸場の復活は国内でも稀有な事例のため、ここに報告する。

### 調査地ならびに方法

ケンボッキ島（N43° 06′, E145° 06′：図1）は北海道東部の厚岸郡浜中町琵琶瀬の沖約600mに位置する、周囲4.5km、標高59m、面積71haの平坦な島である。かつてはコンブ漁期

(1) 道東鳥類研究所  
(2) 特定非営利活動法人エトビリカ基金

に漁師が住んでいたこともあり、番屋跡などは残っているものの、現在は無人島となっている。斜面の一部にハンノキ *sp. Alnus sp.* などの低木林がある以外、島の大部分はミヤコザサ *Sasa nipponica*、オオヨモギ *Artemisia montana* などの草原となっており、コシジロウミツバメ *Oceanodroma leucorhoa*、ウミネコ *Larus crassirostris* などの海鳥が繁殖する（特定非営利活動法人エトピリカ基金 2015）。島の周囲、特に外洋に面した東部から南部にはいくつもの岩礁が点在する。

2013年6月5日に、片岡が霧多布島西部にあるアゼチの岬からケンボッキ島東部の岩礁に1歳以上2頭、新生仔2頭の上陸を発見したため、翌年から本格的な調査に着手し、2017年まで実施した。調査は陸上と海上から行い、陸上調査は4～8月頃の任意の時間（主に午前中）にアゼチの岬から37倍の望遠鏡を用いて島周辺の岩礁を観察してカウントした。ただし、死角も多く、観察条件によっては新生仔の識別や個体数そのもののカウントが難しい場合もあるので、シーズンに少なくとも1回は小型船で島へ接近し、より正確な数を数えると同時に性・年齢構成の把握、個体識別用写真の撮影を試みた。2014年は5月21日、2015年は5月25日、6月3、6日、2016年は5月30日、2017年は5月18、31日にそれぞれ海上調査を行った。海上からの接近はアザラシに警戒心を抱かせるので、1回の調査は10分程度にとどめるよう留意した。船からは10倍前後の双眼鏡で個体数を数えると同時に、400mmの望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラで個体写真を撮影した。



図1. ケンボッキ島の位置。地図は国土地理院の白地図を基に作成

#### 結果ならびに考察

2014～2017年のすべてで1歳以上15～25頭、新生仔3～5頭のゼニガタアザラシが確認された（表1、図2）。ゼニガタアザラシの上陸はすべて島東端の複数の岩礁であった。2017年をのぞき、最大数が確認されたのはいずれも船上からの調査であり、陸上からの調査では死角や

距離による精度の低下があると思われた。ただし、船を出せるのは海況、船船費などの制約があり、利用時期や概数を把握するには陸上からの観察で補う必要がある。各年の陸上と海上からの確認数を表2に示す。外洋に面した島の南側は常に波が荒く船で接近できず、陸からも死角となっているが海鳥の調査・保全のための複数回の上陸調査時にも確認されておらず、利用されていないと思われる。島の北側は砂や礫の浜で、上陸に適した岩礁に乏しいため、上陸場の存在する可能性は低い。

表1. ケンボッキ島における各年のゼニガタアザラシの最大確認数。上段が1歳以上、下段が新生仔で、最下段がこれらの合計。

調査年	2014年	2015年	2016年	2017年
1歳以上	15	20	20	25
新生仔	3	5	3	3
合計	18	25	23	28



図2. ケンボッキ島のゼニガタアザラシ上陸集団 (2014年5月21日)

表2. ケンボッキ島における2014~2017年のゼニガタアザラシの日ごと確認数。斜線の左側が1歳以上、右側が新生仔。陸上からの観察では距離、角度などの問題で新生仔を識別できないことが多く、新生仔がいなかったわけではない。

(a) 2014年

月	日	方法	確認数
5	5	陸	4
	8	陸	2
	15	陸	4
	19	陸	10
	20	陸	11
	21	陸	8
6	26	船	15/3
	1	陸	2
	3	陸	4
	7	陸	5
	15	陸	5
	20	陸	1
7	30	陸	5
	2	陸	7
9	陸	4	

(b) 2015年

月	日	方法	確認数
4	28	陸	8
	9	陸	8
	11	陸	4
	15	陸	6
	18	陸	4
	19	陸	2
5	23	陸	4
	25	陸	12/3
	26	船	20/5
	26	陸	15/1
	27	陸	7
	28	陸	4
6	1	陸	3
	2	陸	6
	3	陸	10
	6	船	14/3
	6	陸	4
	6	船	3/1
7	11	陸	5
	12	陸	6
	13	陸	7
	19	陸	4
	23	陸	10
	29	陸	2
7	6	陸	3

(c) 2016年

月	日	方法	確認数
5	2	陸	23
	18	陸	11
	21	陸	7/1
	22	陸	4
	29	陸	3
	30	船	20/3
6	2	陸	2
	3	陸	15/1
	4	陸	14
	5	陸	15/1
	6	陸	9
	7	陸	7/1
7	8	陸	5
	12	陸	11/1
	14	陸	10
	25	陸	13
	27	陸	7

(d) 2017年

月	日	方法	確認数
4	11	陸	1
	22	陸	4
	24	陸	1
	1	陸	5
	3	陸	4
	7	陸	7/1
5	8	陸	2
	13	陸	15/1
	14	陸	9
	15	陸	9
	17	陸	3
	18	船	23/2
6	19	陸	3
	21	陸	9/1
	22	陸	14/3
	23	陸	11/1
	25	陸	25/2
	26	陸	2
7	27	陸	15/1
	28	陸	14/1
	31	船	18/2
	1	陸	6/1
	4	陸	9/1
	5	陸	4/2
6	7	陸	13/2
	9	陸	3
	10	陸	8
	11	陸	8
	12	陸	6/1
	16	陸	17/2
7	17	陸	4
	23	陸	7
	26	陸	7
	27	陸	3
	2	陸	4
	3	陸	4
7	4	陸	3
	6	陸	3

4年間ともゼニガタアザラシが最初に観察されたのは4月中旬から5月上旬で、もっとも早いのは2017年の4月11日だった(表2)。最終確認は例年7月上旬で、もっとも遅いのは2014年の7月9日であった(表2、※片岡は一年を通じてアゼチの岬からの観察を行っているが、これ以外の時期には観察していない)。この期間には毎年継続して観察され、複数の親子も見られていることから繁殖期前後に小規模ながら比較的安定して利用されていると考えられる。ケンボッキ島で最後に繁殖が確認されたのは1982年であり(伊藤・宿野部 1986)、30年以上の時を経て繁殖場として復活したといえる。一度放棄された上陸場が繁殖場として復活したのは、国内では根室市モユル島だけであり(千嶋 1995)、今後も過程を注視する必要がある。7月中旬から4月上旬まで利用されない理由は不明である。ただ、比較的定住性の高いとされるゼニガタアザラシでも季節によって上陸場の利用様式を変えることが海外の亜種では知られており(Slater and Markowitz 1983; Thompson 1989; Kovacs et al. 1990)、道内でも浜

中湾や根室半島で秋から春にのみ利用される、あるいは秋に上陸数の最大となる上陸場がある(千嶋ら 2000 a, b; 千嶋2002)。厚岸湾周辺でも複数の上陸場間で上陸数に季節変化があり、上陸場間の個体レベルでの移動も確認されている(Uekane et. al. 2012)。ケンボッキ島において何がゼニガタアザラシの上陸場利用の季節変化を引き起こしているのか、島周辺の漁業の稠密度、餌資源の分布などいくつかの仮説は考えられるが現状においては不明である。個体識別による近隣上陸場との移動・交流を含め、今後の研究の進展が望まれる。

また、繁殖場の復活、成立のメカニズムを理解するためには、ケンボッキ島の繁殖、上陸個体の構成・由来を探る必要があるだろう。上陸集団の構成については十分な解析は行っていないが、2014年5月21日、2017年5月18日の観察では5歳以下と思われる幼獣・亜成獣の比率が50~72%を占めた(表3)。同じように繁殖場が崩壊したのち、時間をおいて復活した根室モユルリ島の繁殖場でも幼獣・亜成獣の比率が高かった(千嶋 2002)。海外の別亜種では幼獣が長距離分散することが知られており(Thompson 1993)、出産地から分散した若齢個体が繁殖場の再形成を促進する可能性がある。また、メスの成獣は繁殖期後に季節的な回遊を行い(新妻 1986; 千嶋 2002)、それに伴って繁殖場が形成される可能性も考えられる。近隣の上陸場としては霧多布岬のホカケ岩と厚岸沿岸があるが、上記のような分散、回遊のパターンを踏まえ、近隣の上陸場からの分散によるものなのか、幼獣の遠距離分散やメスの回遊が寄与したもののなか多角的に検討する必要がある。繁殖場の成立のメカニズムの解明はゼニガタアザラシの保護管理を進める上で非常に重要な知見である。ゼニガタアザラシではデータベースを利用した個体識別情報の共有が確立されている(藪田ら 2010)ため、実現可能性は決して低くなく、今後も継続して取り組んでいく課題である。

表3. 2014年5月21日ならびに2017年5月18日のゼニガタアザラシ上陸集団の構成。幼獣・亜成獣(5歳以下)では性の識別は困難なため、区別しなかった。

年月日	成獣			幼獣・亜成獣	新生仔
	♂	♀	不明		
140521	1(5.6)	3(16.7)	2(11.1)	9(50.0)	3(16.7)
170518		2(8.0)	3(12.0)	18(72.0)	2(8.0)

2017年5月18日にはゴマファアザラシ *Phoca largha* の成獣1頭がともに上陸しているのが観察された(図3)。同種は現在、道東太平洋洋では幼獣・亜成獣がごく少数見られる程度(千嶋未発表)だが、1940年代にはアザラシ類の優占種だったとされる(犬飼 1942; 伊藤・宿野部 1986)。ゼニガタアザラシ上陸集団が一種のデコイ効果を果たしたとも考えられ、上陸場の分散・増加は他種のアザラシ類の回復にも効を奏する可能性がある。

ケンボッキ島は無入島であるが観光客の上陸や船による接近はあり、沿岸ではコンブをはじめ稠密な漁業が行われている。ゼニガタアザラシは臆病な性質で日常的な擾乱が続けば上陸場を放棄する可能性がある一方、定置網などで漁業被害を発生させるかもしれない。30年以上の時を経て復活した上陸場とどう向き合い、共存の道を探ってゆくか地域ぐるみの議論が必要であろう。そのため、集団の構成や個体識別といった生態学的情報の分析が不十分な段階ながら公表に踏み切った。

末尾になるが海上調査の便宜を図っていただいた浜中漁業協同組合、船橋広明氏に記して深謝いたします。



図3. ゴマフアザラシ成獣 (2017年5月18日)

引用文献

- 千嶋淳 (1995). ユルリ・モユルリ島でのゼニガタアザラシの生息数変化について. ワイルドライフ・フォーラム1: 85-88.
- 千嶋淳, 上金洋次郎, 浅野悠美, 平松美裕子.(2000). 落石岬におけるゼニガタアザラシの生息状況. ゼニ研通信19: 8-16.
- 千嶋淳, 上金洋次郎, 渡邊有希子, 玉置真一, 平松美裕子, 藤井啓. (2000). 初田牛(ニツ岩)におけるゼニガタアザラシの生息状況. ゼニ研通信19: 17-26.
- 千嶋淳. (2002). モユルリ島におけるゼニガタアザラシの上陸場利用様式. ゼニ研通信特別号:45-67.
- 千嶋淳, 藤野夏子, 永井祐紀, 白井寛恵. (2010). 2002年6月ケンボッキ島調査報告. ゼニ研通信 23: 16-24.
- 犬飼哲夫(1942). 吾が北洋の海豹 {I}, {II}. 植物及動物 (10):37-42, (11): 41-46.
- 伊藤徹魯, 宿野部猛. (1986). ゼニガタアザラシの生息数と生息状況. 「ゼニガタアザラシの生態と保護」(和田一雄ほか編), pp.18-58. 東海大学出版会, 東京.
- 小林由美, 桜井泰憲. (2010). 北海道浜中町におけるゼニガタアザラシ *Phoca vitulina stejnegeri* を中心とした海生哺乳類の生息状況に関する聞き取り・ストランディング記録. 根室市歴史と自然の資料館紀要22: 29-36.
- Kobayashi Y, Kariya T, Chishima J, Fujii K, Wada K, Baba S, Ito T, Nakaoka T, Kawashima M, Saito S, Aoki N, Hayama S I, Osa Y, Osada H, Niizuma A, Suzuki M, Uekane Y, Hayashi K, Kobayashi M, Ohtaishi N, and Sakurai Y. (2014). Population trends of the Kuril harbour seal *Phoca vitulina stejnegeri* from 1974 to 2010 in southeastern Hokkaido, Japan. *Endangered Species Research* 24(1): 61-72.
- Kovacs, K.M., K.M.Jonas and S.E.Wilke. (1990). Sex and age segregation by *Phoca v*

- itulina concolor at haul-out sites during the breeding season in the Passamaquoddy Bay region, New Brunswick. Mar.Mamm.Sci. 6: 203-214.
- 新妻昭夫. 1986. ゼニガタアザラシの社会生態と繁殖戦略. 「ゼニガタアザラシの生態と保護」(和田一雄ほか編), pp.59-102, 東海大学出版会, 東京.
- Slater, L.M. and H. Markowitz 1983. Spring population trends in *Phoca vitulina richardsi* in two central California coastal areas. Calif. Fish and Game 69: 217-226.
- Thompson, P. M. 1989 Seasonal changes in the distribution and composition of common seal (*Phoca vitulina*) haul-out groups. Journal of Zoology 217: 281-294.
- Thompson, P.M. 1993 Harbour Seal Movement Patterns. Symp. zool. Soc. Lond. 66: 225-239.
- 特定非営利活動法人エトピリカ基金. 2015. 北海道の里海における海の鳥獣の生態と保全研究及び普及活動 平成26年度報告書. 特定非営利活動法人エトピリカ基金, 浜中.
- Uekane, Y., T. Kariya, J. Chishima, Y. Kobayashi, T. Naruse, S. Saito, M. Kawashima, and S. Yabuta 2012. Seasonal changes in the distribution of Kuril Harbour seal (*Phoca vitulina stejnegeri*) at three haul-out sites near Akkeshi, Hokkaido, Japan. Nemuro City Museum of History and Nature 24:49-59.
- 薮田慎司・中田兼介・千嶋淳・藤井啓・石川慎也・刈屋達也・川島美生・小林由美. 2010. ゼニガタアザラシの写真及び個体情報デジタルデータベース: 野生哺乳類の長期野外研究を支援する試み. 哺乳類科学50: 195-208.

#### Summary

Kenbokki Island where located Hamanaka-cho, Eastern Hokkaido was Kuril Harbour Seal's haul-out site until 1970s. But, they were disappeared by hunting and other factors. No seal was at island in 1996 by hearing from local fishermen and only 1 seal was observed on the sea by 2002 field survey. In 2014-2017, we confirmed 15-25 adult seals and 2-5 pups every year during seabirds research near the island. By observation from land, seals used the island only April to July. Reason that the island was used limited season by seals is still unknown. Breeding records at Kenbokki Island was since 1982, over 30 years. Our records are rare case that haul-out site of Kuril Harbour Seal have recovering.

#### 図表タイトル

- 図1. ケンボッキ島の位置. 地図は国土地理院のもの.
- 図2. ケンボッキ島のゼニガタアザラシ上陸集団 (2014年5月21日).
- 図3. ゴマファアザラシ成獣 (2017年5月18日).
- 表1. ケンボッキ島における各年のゼニガタアザラシの最大確認数. 上段が1歳以上, 下段が新生仔で, 最下段がこれらの合計.
- 表2. ケンボッキ島における2014~2017年のゼニガタアザラシの日ごと確認数. 斜線の左側が1歳以上, 右側が新生仔. 陸上からの観察では距離、角度などの問題で新生仔を識別できないことが多く、新生仔がいなかったわけではない.  
(a) 2014年 (b) 2015年 (c) 2016年 (d) 2017年
- 表3. 2014年5月21日ならびに2017年5月18日のゼニガタアザラシ上陸集団の構成. 幼獣・亜成獣(5歳以下)では性の識別は困難なため, 区別しなかった.